

り、次なる作品を生み出す原動力を得るのである。

文学史という言葉から連想される、どことなく微臭い本の堆積、過去の遺産という印象を払拭して、「今、何を書くか」ということに直面している者の、現在観あふれた、生産的な文学史を志向できればと思

う。いや、とにかく気構えだけでもそうしていれば、精読が少々、誤読をはらみ、山脈がぼやけてしまっても、文学史の意義は保てるのではないかと、慰めている。だが、これにより心の重荷がその分軽くなったかと言えば、どうやらますます重くなってしまったようだ。

## 地球科学転換期との遭遇

木村学

香川大学へ赴任して約2カ月、やっと少し落ち着いてきたこの頃である。生まれ育った北海道を離れ、見る事、聞く事、新しい事の連続であった。人間、住み慣れた場からとび出し、新しい地へ足を踏み入れることはなかなか大変なことである。しかし、それはまた楽しいことでもある。

話は変わるが、地球科学の分野では、60年代から70年代がちょうどこれと同じような時代であった。1980年代に一度死に絶えた大陸移動説が、50年代に近代的装いも新たに不死鳥の如く復活し、それが60年代に海洋底拡大説と結合、60年代末にプレート、テクトニクス理論として登場したのである。それは100年に1度あるかないかの「科学の革命」にふさわしい出来事であったことはあまりにも有名である。しかし、日本の固体地球科学界は70年代を通じて、これを認めるかどうかで激しい論争が展開された。それはとくに地質学の分野で激しかった（現在も継続している）。すでに学界内でそれなりの地位や権威を獲得していた人達は、プレート、テクトニクス理論に

対して激しく抵抗した。私の学生、大学院時代はちょうどこの真ただ中にあった。私は学生、大学院時代を通じてプレート、テクトニクスに関する講義らしい講義はきいたことがない。むしろプレート・テクトニクス理論に対する批判を多く聞いた。このことは少なくとも旧帝大系の地質教室ではよくあったことらしい。古い観点で研究を押しすすめ、自らの体系をつくってしまった人達は、それが根底からくつがえされる事態に直面した時、保守的にならざるを得ないのであろう。その点で日本の地球科学界、とくに地質学の分野をみた時、柔軟、機敏にこの新しい流れに対応したのは、多くはいわゆる地方大学であり、若手の研究者であった。それが、今や主要な潮流となっている。日本列島形成の理論は60年代～70年代前半に語られた、私が教育をうけた内容とは全く異なることが明らかにされつつある。学生・大学院時代にまのあたりにこのような歴史的場面に遭遇し、また、そのかわりで研究出来たことはこの上なく楽しいことであった。

このプレート・テクトニクス理論を認めるかどうかの議論の中で認めない人達に次のような論調があった。『日本人は外国で作られた研究、理論の応用は得意であるが、独創性にとんだ“日本ので世界的”な研究はダメである。プレート・テクトニクス理論は外国で作られた理論であり、それをそのまま日本列島に機械的にあてはめ応用しているのが、この理論を支持している人達である。プレート・テクトニクスに對置する新しい理論を作ることこそ、日本の地球科学者のやるべきことだ』と。これは、最近、日立・三菱のIBMスパイ事件にもからんでマスコミをにぎわしている『日本は応用の科学は得意だが、最前線を切り拓く、独創的に新しいものを作り出すことがヘタだ』との論調に似ており、日本の研究者が長い間うけつけてきた批判でもある。「独創性」のことに日本の科学者は弱いらしく、上記の論点は一定の説得力をもち、地質学者のプレート・テクトニクスに対する抵抗の強さの一因になった。

しかし、私にはその論点の前半と後半の間にすりかえがある様に思えた。プレート・テクトニクス理論の中で「海洋プレートの海溝での沈み込みと島弧の形成」は重要な基本的原理の1つであり、そのことを徹底して研究する上で日本列島及びその周辺は地球の中で最もよいフィールドである。この基本的原理の徹底した研究こそ、日本人の地球科学者が出来る最も「世界的」なことであり、もし仮にプレート・テクトニクス理論が否定されるとしたら、そこからなされるであろう。固体地球科学の中で「日本ので世界的な研究課題」はむしろ鮮明である。独創性は科学の最前線と切り結んで、あるいは切り結ぶことを見通した時にはじめて威力を発揮するものであり、そこからはなれて一面的に強調すると「孤立する科学にのみ栄光がある」との教条主義を産み出すことになることもこの間の地球科学界の重要な教訓である。

(1982, 6, 29)

## 新任体育教官として思うこと

保健体育科 山 神 真 一

香川大学に勤めて早や8ヶ月が過ぎ、ようやく気分的にも落ちつきを感じる今日この頃である。出身大学というのは、やはり良いもので知らず知らずのうちに自分の学生時代を反芻してしまう。しかし、これからは立場が変わり体育教官として何を求め、何を行うべきかと試行錯誤していかねばと思っている。

そこで、現地点での体育教官としての所信、特に授業に対する自分の考えを述べることにする。

今の学生にとって体育とはどのような意味をもっているのか、どのような意識で体育の授業(一般体育)を受けているのか。現状把握は授業を行う上で重要である。その意味から、今回、大学の体育授業に望む